



発行所
十勝毎日新聞社
©十勝毎日新聞社 2007
〒080-8688
帯広市東1条南8丁目
TEL(代表)0155-22-2121
編集局 0155-22-2121
広告局 0155-23-2323
販売局 0155-24-2222
庶務局 0155-22-7555
総務局 0155-24-2299

発展の芽

4 十勝で発掘

巨大飛行船出現 住民の語り草に

全長68メートルの白い物体がはっくりと大樹の大地から離れていく。遠くからでも分かるその威容。のどかな酪農と漁業の町に突如出現した実験用の飛行船に、目撃した住民は一様に驚いた。

2004年に町多目的航空公園(町美成で実施された成層圏プラットフォーム実験。そのインパクトから、今でもまちの人の語り草だ。町の宇宙関連の

日本で唯一の環境 好評博し施設充実

町が宇宙基地誘致の夢を託した同公園は、1995年に完成した。砂利なををて在した全長1キロの滑走路が広大な敷地。



年間キャンペーン第2部

大樹<下> 宇宙

取り組み浸透 研究者と連帯感

航空宇宙技術研究所(航技研)が小型飛行機「ドルニエ」による実験を始めると「時間に制限があったときはついにはこころをやったなど思った」と感慨深げに振り返る。

「航技研」の好評を博し、関係者の気持ちは施設の充実とまい進。総上費約4億円で滑走路をスワール舗装した。



5月末に町多目的航空公園で行われたモーターグライダーの試験。同公園では頻りに航空宇宙実験が実施され、技術力アップに貢献している

長年の取り組みが浸透し、人口6500人の町民には宇宙関係者との仲間意識、連帯感が芽生えていた。同公園のそばで酪農を営む小山田又五郎さん(71)は「早朝の実験は寒かろうと搾乳後の牛乳を沸かし、ポリタンクで連日飛行船実験メンバーに振る舞った。大樹漁協は別の実験で海に落下した飛翔物の回収作業に漁船を出した。

大樹町は、道内研究者の拠点にもなった。道工業大の佐藤新准教授は、社長を務める北海道衛星本社をこの町に置いた。今

後打ち上げる実用衛星を「航空宇宙に情熱を傾けているまちにちなんで『大樹』と命名する」と

町づくりの主な歩み	
1985年	道航空宇宙産業基地研究会議設立
86年	町長らが種子島宇宙センター視察
88年	大樹町スペース研究会発足
92年	宇宙科学研究所がロケット回収実験。町での初の宇宙関連実験
95年	町多目的航空公園オープン。実験機「ドルニエ」の評価試験
98年	滑走路舗装完了
2000年	宇宙開発事業団が月面軟着陸技術検証実験
04年	成層圏プラットフォームの本格的な飛行船実験
06年	米ロケットブレン社が商業用ジェット機の発着候補地として視察
07年	宇宙航空研究開発機構(JAXA)が三陸大気球観測所の大樹町への移転(来年度)を表明

07年5月大樹はまた一歩宇宙に近づいた。宇宙航空研究開発機構(JAXA)が三陸大気球観測所(岩手県大船渡市)を08年度、同町に移転すると表明したのだ。米ロケットブレン社の無重力商業飛行の離発着候補地、500億円を投じる宇宙エネルギー開発基地の構想浮上。最近では宇宙のまちが話題に事欠かない。

「成層圏」実験が行われた04年度の経済効果額は約5億2000万円。昨年末町で開業したヒュースホテルは、実験関係者が宿泊して混雑している。地方経済が冷えていた中、大樹は活性化への光が見える。宇宙基地誘致構想から22年。広大な宇宙を目指す小さな町の挑戦は続々。歩みがいづか宇宙に届く(信じて)。(松村智裕)

宇宙の話題次々… 小さな町挑戦続く